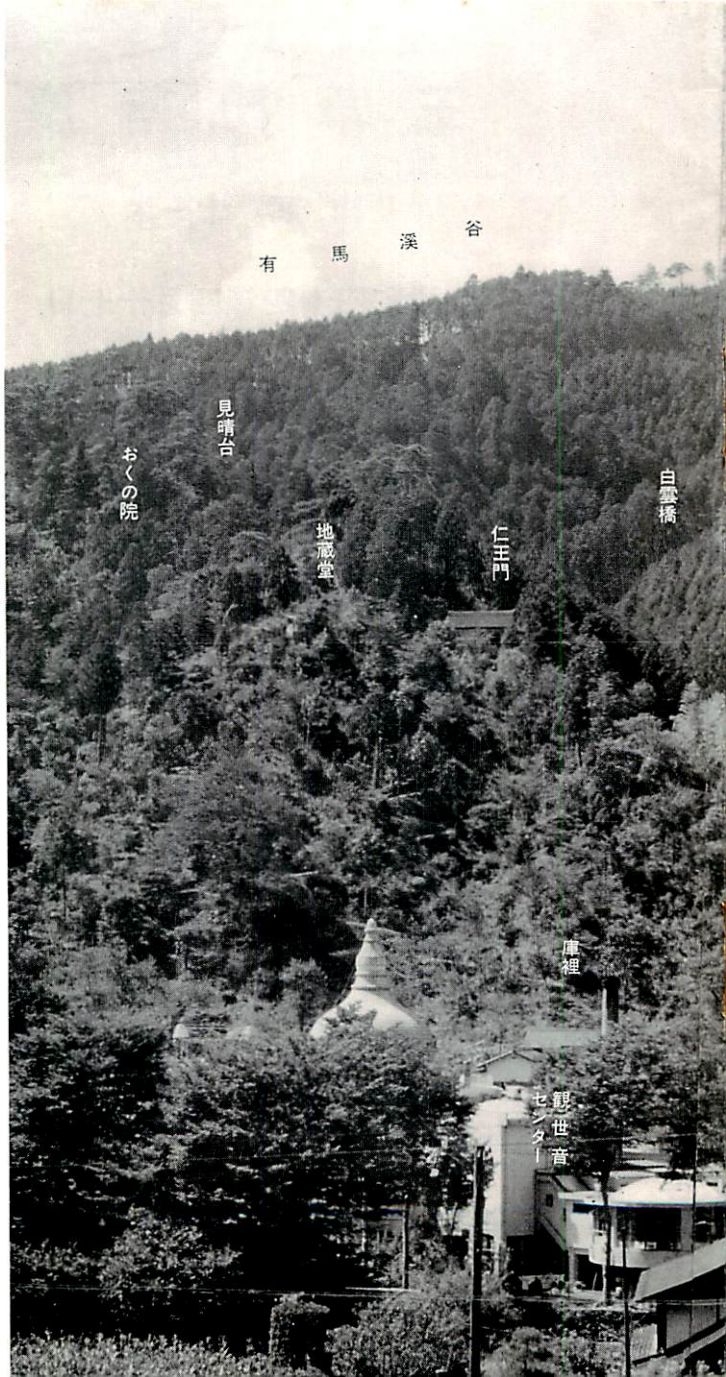


白雲山 鳥居観音のしおり

10

昭和四十四年四月一日発行



玉華門落慶

総高 十一米

昭和四十四年四月十七日



来る四月十七日観音様の春季例祭日に落慶式を
執行します。是非御参例下さい。

玉華門建立の縁起 洞江

故水野梅曉老師が生前、玄奘三藏法師の靈骨塔と、支那門の建立を私に依頼されました。

三藏塔は皆様の御協力で昭和三十五年白雲山頂に建立する事が出来ましたので、引きつづきこの一風変わった塔にふさわしい門を造り度いと念願して、東南亜、台湾等を視察し研究を重ねて、漸く構想がまとまりましたので、昭和四十一年末に着工して、本年の春、庭園の完成までこぎつけました。

この門は昨年一月に遷化なされた、高階瓊仙殿下、が、玄奘法師が、訳経をなされた、唐の寺の門の名にちなみ「玉華門」と命名して御染筆下されたのを額にしたのがこの門に一段と光彩をそえております。

総高十一米の門の、棟の龍と、下り棟や欄カンの鬼や軒先の鳳凰、等は江古田の小さなアトリエで製作しましたので、取りつける迄は調子が合うかどうかと、心配でしたが、何とか納まったのでほっとしています。

柱のコマ犬のレリーフは、タイ国の古都、チェンマイのお寺にあったのをまねたのですが、門の引立役になつたように思われます。



玉華門柱の狛犬レリーフ

周田に植え込んだ沢山の、もみぢ、つつじ等が大きくなれば、この門と融合して、一段と風致をそえる事と楽しみです。

玉華門の落慶式は、鳥居観音の、春季例祭に当る、「四月十七日」に挙行政致します。

折柄、白雲山はつつじの花や若葉の見頃となりますので、皆様には何卒御家族御同伴にて御参列の上、玉華門を御批判賜りますれば幸甚に存じます。

この門が恙なく出来上りました事については、長年に渡り、有縁の皆様方の涙ぐまじき御協力のお蔭と存じ誠に感激に堪えません。

斯に謹んで御礼申上げます。

合掌

アラブ・地中海沿岸の旅路

(其ノ五)

桐江

こぼれ話

四回にわたって堅くらしい事ばかりかきましたが、今回は裏街道のこぼれ話を少し書いて見ます。

外国に永く旅行すると、日本食がたべたくなるだろうとのことから、今度のスケジュールにもローマと、パリーで日本食堂に案内されました。

その店は日本情緒が味わえるような造りになっていて、男はハッピに鉢巻、女は和服姿といういで立ちでした。

私は十七年前アメリカを三カ月ばかり旅行しましたが、終始規格的な大味のアメリカ食なので、味噌汁がなつかしくなり、たまたまニューヨークで、友人から日の丸のおむすびを馳走になった時の事は、今でも忘れることができます。

しかし今度の旅行は十一カ国もとび歩いたので、その国それぞれの持味がちがっており、又珍しいものも多くあります、たのしかったです。

ですから食道楽の方々は、その国々のたべ歩き旅行

をなさるのも一興かと存じます。

大きなパン

イラン、イラクでは七〇センチもあるかと思われる傘のような大きなパンを、頭にのせてあるいている人や、これをぶらさげてかぢりながらあるく人等、珍らしい情景も見られました。だんだんエジプトに近づくと、三〇センチ位の丸型のものや、ステッキの様な長いパンをかごに入れたり、頭にのせて、運んでいる姿もよく見うけました。

食堂ではこれを切って出しますが乙な味でした。

ところが西の国に行くにつれ、型も味もちがって来てフランス近くになると、全く日本と変らなくなるなど、パンだけでも興味がありません。

色々の食べもの

アラブ諸国では印度で牛を神として、崇めているため絶対に殺さないと同様に、豚を食べませんが、これも信仰から来ている習慣なのでしょう。

水牛は見うけられますが、ほとんど羊（シシカバ）や鳥の料理に山羊の乳等のまされまゝです。

しかしビルマや印度のように、馬鹿辛い料理は少なくて助かりましたが、量が多いので私達出されたものを少しずつ味見する程度で、全部たべる人は吾々一行には少ないようでした。そんな料理を外人は全部たべてしまうのですから、外国人の胃袋は大きいですね。

エジプトではナイル河でとれる鱸ササギに似た魚が出ますし、地中海でとれる色々の魚の料理がありますが、すべて大味で、海国日本の魚にはとてもかたやしません。

地中海沿岸では貝の種類が多いとみえて、生貝立食いの店をよくみうけました。そして食事の前菜には十数種の貝類を出した処もありまして、前菜の貝類を試食しただけでも満腹してしまいました。

ギリシャ辺では、タニシ、蛙、カタツムリのようなゲテモノ専門の店に案内されましたが、珍らしいというだけであまりいい気持ではありませんでした。

ナツメヤシ

アラブ諸国には、東南亜の様な大きな実の成る椰子の木は少なく、ナツメヤシといって親指程の黄色い実が、日本のしゅろの実の様に鈴成りについているの

が、群生していてこれが珍らしく美事でした。

そのおちている実を味わってみたら、黄色

のは渋くてたべられませんが、くさっているかと思われる褐色のは蜜のように甘くて、これがいろいろの料理に使われています。

そしてナツメ椰子は外貨もかせいでいるといわれる程沢山生産されます。

オリブの料理

クレタ島（四国の半分位）では八百米位登った峠の景色のよい所に、フェストス王宮の遺跡があつて、そのレストランの料理は全部純粹のオリブ油で、かかったもので、不断油ものを食べない私もついたべすぎました。

ところが食後に食パン一片位もあるチーズが出たの



ナツメヤシ

で、さすが私達一行には手を出す人はおりませんでしたが、外人は習慣とみえて、食後の果物でもたべる様に、ペロツと平らげてしまうのにはおどろきました。

イスラエルのユダヤ料理

私がアメリカで純粹のユダヤ料理を馳走になった事がありました。皆チーズのくさったようなものばかりで、なやまされたことがあるので、イスラエルでもやられるかと思っていたところ、ユダヤ人は二千年の間世界中に散らばっていたのが、今回独立したので、帰る人が多く、ホテルの従業員も三十数カ国から、帰ったものの集りだといわれるだけあって、食堂は世界的ないろいろの料理が味わえました。

朝食にはこれら数十種の料理が並んでいて自由に選ぶ事が出来ます。勿論チーズ料理が多いのですが、日本の鮭に出る小鱈たたらの酢漬のような日本味の物もあって、世界の料理の試食会の感じがしました。

イスタンブールの黒海の入口の海上レストラン、又はスペインのトレド市を見下ろす絶壁上のレストラン等でも、その国独特な珍味は印象にのこっています。

生落花生

イスラエルのキブツ（集団農場）を視察の時畑に落花生を収穫したあとのつるにとり残しのものがあり、案内した人がそれを私達に「たべてみよう」といいます。日本では生では生ぐさくてたべられないと思いましたが、ためしにたべてみた処が香ばしくておいしかったです。これは熱砂の畑で自然に煎れたためか、生でたべられる種類なのか、珍らしい落花生でした。

珍らしい果物

アラブ諸国では、砂漠の国だけあって、西瓜と、メロンのような水分の多い果物が沢山たべられて助かりました。メロンも五〇種以上もあるような大きなもので、味はマクワ瓜のようでした。西瓜も野生的な型ですが、雨がふらないためか、日本のより甘味が強いようでした。今度旅行した国々はブドウの産地だけあって、どこへ行ってもブドウは



果物を買っているロバ

こへ行ってもブドウは

たべられました。日本のように品種改良などはしないと見えて、緑色のだけですが、味は実に甘くておいしかったです。其他熱帯の果物が珍らしく、油こい肉料理をとらない私はこれら果物のおかげで体が保ったと思う程でした。

殊にエジプトでは、道端でマンゴーを売っていましたが、さすがに果物の王だけあって、実にうまかったので忘れられません。

近頃は東京で冷凍物を売っていますが、原産地の熟したものととは比較になりません。

それは日本の枇杷や無花果など木で熟したのと、少し若いのをとって果物店で売っているのとの味の差と同じです。

生 水

国を出る時、水に注意するようになるといわれ、水筒をもって行きました。ホテルで湯を入れてもち歩きましたが、どんな田舎に行っても、ジュース類、果物があつて、生水をのむような心配はなくて、ついに水筒は邪魔になりました。

殊に、コカコーラは至る所に氾濫していて、その商魂にはおどろきました。

水のない所ではこのコカコーラで顔を洗うという話もききました。

酒類は回教徒には禁じられていると、いうことです。が、入国の時許可をもらえばビール等、どこでものむことが出来るのは観光客第一主義の現われで、一行のうちにも水がわりに、三度三度ビールをのんでいる人もおりました。中には日本酒の缶入りを沢山持参している人もありました。

水といえば飛行機の中で食事の時水の缶詰が出たので、一つもち帰り鳥居観音の寺務所などで、丁度そこに合わせた人達に、「何の缶詰かあててごらん」

と、問うてみましたが、誰も水とは思いません。手にとつてさかんに首をひねり、ふつてみたりします。が、ついに当りませんでした。

水の貴重なアラブでは、石油でもうけた金で海水から飲料水をとる施設が盛んに出来ているようですが、水は何といつても日本にわき出る清水のうまさに、まさる水はどこをたずねてもありません。

気味わるいヤツカーン

ギリシャの街頭で大きな、たらい、のようなものに蛙の卵のような、ドロドロした液体の中に、小さな粟

粒位の黒い粒々が沢山ある飲物を売っていて、それが丁度春になるとドブ池に見る、大ひきがえるの卵そっくりなので、胸がわるくなるようなしろものを、同行の岡田兄がのんでおられるので、さすが悪物ぐいの私もおどろいて、

「うまいですか？」ときいたところ、

「とてもうまいです、くすりになるとのことで、前の旅行の時に試験ずみです」と言われて、おどろきました。

その他異様な、いろいろのたべものや乾燥した、珍しい様々な木の実が大道で沢山売られています。

ぶどう酒飲み放題

ギリシャである夜「ぶどう酒の飲み放題」という、レストランに案内されました。入口で入場料を払い、中にはいると公園のような広い庭園に、ダンス場から演芸場、音楽堂其他いろいろの遊ぶ施設があつて、先ず入口で、コップとフラスコを受けとると、所々に大きなビーヤ樽がおいてあり、人形でみるような古代のギリシャ服を着かざった美人が、大勢で愛嬌たっぷり、フラスコにぶどう酒をついでくれます。

それを持つてのみながら見物して歩くのですが、な

かなか強い酒で、私など一口ものめません。ですからよっぱらいもいるし、けんかもあるらしくて、警官もいます。園内には二三千人位の人達が、ダンスをしたり演芸をみたり、テーブルを囲んで談笑している情景は、あたかも天国にまよい込んだような気もちになりました。

しかし帰る時は皆フラスコの酒をすてて、きれいに洗って返すのですが、何だかもったいないようでした。

野外食堂とナイトクラブ

大部分が砂漠のアラブ諸国は昼は非常な暑さですが、夜になると、それが急に涼しくなるので、ここに住む人々は夜こそたのしい時間なのです。

私達も夕食は涼みがてら音楽などききながら、食事をするところに案内されましたが、砂漠の国ならではの感をふかくしました。

日本人がいると荒城の月など、日本の歌をうたつて私達観光客をねぎらってくれる、サービスぶりは満点で、いい気分になりました。

イスタンブール(トルコ) エジプト等のオリエンタルダンスも中々見ものでしたが、スペインの「カスターネット」(木製の蛤のような二枚の丸い板を合わせた

もの)を両手にもって、カチャカチャさせながら、踊ったりまた鈴のついた、タンパリンで踊る情熱的なフラメンコダンスはみごたえがありました。



バクダットのオリエンタルダンス

翌日トレ

道への途中景色のよい所で、小休止した処で「カスタネット」を娘が売っていたので、皆で買いましたが、未熟の私等には昨夜きいたような、よ

には相手のダンサーのブラジャー等、はぎとる特権があるのもおもしろく感じました。

ギリシャの食堂(タベルナ)

道路信号の赤い時は、「アルケ」といい、青い時は、「アブナイ」というような発音なので、おぼえやすいのです。又イスラエルのガイドの名は、「サルマワシ」というような発音なので「猿廻しさん」と呼ぶと、ニコツとしてふりむくので一同くすくす笑いました。

ギリシャの首都アテネ市の中央に一六〇メートルもある高い岩山の上に、名高いアクロポリスの古城があります。夜はエジプトピラミッドの照明と同じように、サーチライトで夜空に城を浮き上がらせている神秘的な情景を見ながら夕食を楽しむ「タベルナ」に案内されました。

ここでは食堂のことを「タベルナ」といいます。

この「タベルナ」の天井には何十とも知れない色々なゲテモノがぶらさげてあり、先ず妙な印象をうけますが、料理もブドウ等の葉で色々な物をつつみ、油であげたようなものや、目を白黒してたべるような色々の料理も出ました。そこへ古代そのものの服装や楽器で流しの歌うたいや、物売り娘も来るので数千年前の

い音はとも出ませんでした。

又あるナイトクラブでは中央で踊りながら観客を引っぱり出して、一緒に踊らせます。私達の団長の加賀さんも引っぱり出されて調子を合わせて踊ったので、外人達はやんやと拍手していました。そして踊る観客

アクロポリスの中にさまよっているような雰囲気になり、印象的でした。

ロマンチックなナイル河

エジプトの母といわれるナイル河の上流に古都、ルクソールがあります。夜町を散歩すると歩道で、色々のゲームを楽しんでいるので、見ていると、ここにこしながら「すわれ」というような親しみのある人種なので、古代エジプトもかくやと思われました。

このナイル河の岸のホテルの屋上の食堂で夕食を致しましたが、ひる間の炎暑は去り、涼しい風を送ってくれるナイル河のはるか彼方、砂漠の地平線に日本では見られないような、赤々と大きく神秘的な夕陽が沈みかけると、砂漠やナイル河のさざ波は五色に輝いてその大自然の美しさにぼう然とするばかりでした。

その頃はるか東方の上空に折からの満月が丁度トマトのような赤々とした色で大きくうかんで来ました。

十二年間も一滴の雨も降らぬ、というすみ切った青空にかがやき出した雄大なこの情景に心うたれて、思わず「砂漠に陽はおちて、夜となるころ……」のロマンチックな歌を、いつかしらず口ずさむような、まざまざとみるこの実感にこころをうたれ、日中、四〇度

を越す灼熱の旅も忘れさせてくれるのでした。

レバノンのトバク場

レバノンには自由国だけあって、公設のトバク場があり、米国のラスベガスや、欧州のモナコと並んで、実に盛んです。最近では石油で、しこたまもうけた、アラブ人がはでに財布をはたき、活気にみちているので、ピーピーの吾々ではとても中にはいれません。

各国のバザール

バザール

どこの国でもバザールを見物しました。この所ではあらゆる品物を売っています。アラブのバザールはその国の伝統をつぐ原始的な手工業で、金ぞくその他昔のままの珍らしい工作をしている所もあり、ごったがえしている所も多く、一行にはぐれたらおしまいです。アラブ人は女が働き男は遊んでいるとのことだす



が、道端で男達が水煙草を吸っているのんびりした光景は印象的でした。しかし、だんだん西の文明国に進むに従い、パザールの規模は大きく、ノミの市、ドロボー市等ありまして実に珍妙です。

その中の美術品店だけでも、クズ鉄から高級美術品に至るまで何でも所せましとおいてありました。

水 煙 草

水煙草は高さ八〇センチ前後で、上部に煙草を一つかみ位丸めて詰め、下部には水を入れたガラス瓶があつて、煙はその水の中をくぐってゴム管を通じてすわれるという、ニコチンよけの仕組になつてゐるもので、朝鮮の長い煙管よりもよく、又すつてゐる姿も実にのんびりしてゐます。ただこれを持ち歩くことは出来な



水煙草を吸つてゐる筆者

いので、こせこせした日本人等にはどうでも使えぬ品ではありませぬ。

ホテルの庭園の休憩所に

も水煙草をすう設備があります。ここで一日すつていたら定めしのんびりした人種になれることでしょう。私もみやげに買いましたが荷造りしたら、長さが一米もあるの持ち帰るのに苦心しました。家に帰ってから皆で試煙してみました。煙を口迄すい上げるのに大変な努力がいるしろものです。

パ ナ マ 帽

一昨年台湾でバナマ帽を買い、今度で三回目の外国旅行に供をしてくれたのです。無帽主義の私は何度もおき忘れたのですが、その度毎に同行のどなたかが、もつて来てくださったので、忘れてしまいました。

ところが今度のアラブ諸国は乾燥が甚だしいため、せんいがガサガサに折れて、前の方に穴があいたのでテープではつたのですが、次々とコーヤクばりが多くなって、むざんな姿となつたので、捨てようと思つたが、長い間私の頭を保護してくれたので、旅の思い出にともち帰りました。

チャドル（被りもの）

アラブ諸国の婦人は皆、チャドルという黒色等の布を頭からすっぽりかぶつてゐます。中には目だけしか

出していません。これはイスラム教の戒だとか、又男の嫉妬からともいわれていきます。

併し若い女性の中には新時代にめざめて、ミニスカートで颯爽と歩いている姿も見られます。

その現われた顔をみると、数千年前のエジプト等で彫刻された顔そっくりの彫の深い美人が多いのおどろきました。



婦人のチャドルの問題

チャドルの婦人を写真にすることははいけないことになっていきます。殊に、イラクはやかましいのですが、飛行場でチャドルを破った数名の貴婦人がいました。

皆アラブ的

美人なのでつい写真をとったところ、婦人達は指さしながら私を追ってくるので、逃げかくれること三十分

やっと飛行機にのがれることができてはっとしました。チャドルの婦人を写すと男性になぐられた例が沢山あります。そのため警察が保護のため留置すること、同行の人達は「平沼は警察に引っぱられないかと心配した」といわれ、本当にわるいことをしたと頭をかきました。

昨年十月末印度旅行の結団式の折に、この話が出て「平沼君あぶなかったね」と、いろいろな思い出話の中で一番花が咲きました。

日本人に対する感情

アラブのある所で「日本人は勤勉で世界を相手に戦い、敗戦という、うき目を見たが、驚くべき発展をした偉大な国民だ」とほめられたことがあります。そのおかげで私達も白人の圧迫から独立し得たとはいいませんでしたが、どこでも日本人に対する親しみはよくうかがわれました。

アラブ諸国は東南アジアより遠いので、日本をよく知っていませんので、一行中に、日本服を着ている婦人を見つけると「ジャッパン」といって親しみを見せるところもありましたが、時には「フライリッピン人」かとか、「チャイナ」とかきかれたこともありました。

しかしあれ狂う砂漠と戦いながら、乞食のような原始的な生活をしている民衆をみると、外国人に支配されたことのない日本の過去の歴史の有難さを痛感せずにはいられませんでした。

最近イスラエルとアラブの小ざり合いは、はげしくなつて危険なので、その後の観光客はヨルダンの戦争地帯は見物をゆるされないとのこと、私達がこの戦争地帯を見物出来たのは幸運だったと思います。

その他失敗談や、炎暑の中でのなやみ等、の話も沢山ありますが、京成トラベルのガイドの原さん等の親切なご指導のおかげで、無事に生きて帰ることが出来まして仕合せでした。

アラブ、地中海沿岸の旅路と題しまして、「しおり」六号から十号にわたつて連載いたしました、文章も未整理のまま、おわかりにくかったことと恐縮いたしております。

ただ参りました国々に伝承されている歴史、文化、風俗、習慣、経済、生活等の一面を紹介したにすぎませんが、そのうちから、何かご参考になることを、日本のそれと引合わせてお考えいただいたら、おもしろいことと存じます。

これでこの旅行記を終わります。

合 掌

西 遊 記 (其ノ五)

洞門外にしばらく混戦が続いた。独角鬼王と七十二洞の妖怪どもは、ことごとく天将の手に落ち、四健將と一むれの猿だけが逃げのびて水れん洞の奥深くひそんだ。

悟空は、鉄棒を振るつて四大天王、托塔李天王、哪吒太子らと、空中でながいあいだ渡り合ったが、日もはや暮れかかると見るや、一つかみの毛を抜き取つて口中でかみくだき、プツと吹き出し、「変われ!」と一声、叫ぶ、と、たちまち百千の悟空となつて、手に金箍棒を打ちふり、哪吒太子を撃退し、四大天王を打ちまかしてしまつた。

勝利をはくした悟空は、毛を取め、いそぎ洞に引帰すと、はやくも四健將が、手下を引きつれて鉄橋のもとまで出むかえ叩頭して、オイオイ三声泣くかと思ふと、ワッハハと三声笑う。悟空、

「お前たちはおれの顔をみて、泣いたり笑つたりするのはどうしたわけだ」

といぶかると、健將は答えた。

「けさからの戦いで、独角鬼王と七十二洞の魔王たちは、ことごとく天将どもにいけどられ、われわれの

みにげのびました。これが泣かずにおられましようか、
ところが大聖さまは勝を得て、けが一つしないでお
帰りになりました。これがうれしくなくてどうしまし
よう」

悟空は言った。

「勝負は兵家の常、何もくよくよすることはない。

われわれは備えをしつかりとかためて、十分に腹をこ
しらえ、ゆつくり眠って英気を養うのだ。夜が明けた
ら、おれが大神通力をあらわして、天将どもをいけど
りにし皆のかたきをとってやる」

さて、かの四天王、戦い終って兵を取め、それぞ
れの手柄を報告したところ、捕りよにした野獣のたぐ
いは無数であったが、猿と名のつくものは一匹もいな
かった。即座に天将たちの論功行賞を行ない、天羅地
網を張る兵たちには、それぞれ振鈴やかけ声で警戒さ
せつつ、花果山をひしと取り囲んで、明朝の激戦にそ
なえさせた。兵たちは命を受けて、持場持場をかため
た。夜明けとともにいかなる結果となるであろうか。

観音会に赴く

天神の包囲のうちに、悟空が安らかな眠りについて
いたことはしばらくおく。

さて、南海普陀落迦山の観世音菩薩は、王母から蟠

桃大会に招かれ、高弟の惠岸行者とともに宝閣瑤池に
やって来たが、みれば宴席はとり散らかされ、何人か
の天仙はいるけれども席につこうともせず、何事かが
やがやと話し合っている。天仙たちは、菩薩とのあい
さつが終ると、事の次第をくわしく申し立てた。菩薩
は言った。

「会がないのでしたら、みなさん、ごいっしょに玉
帝にお目にかかりましよう」

仙人たちが菩薩について通明殿の前にくると、はや
四天天師、赤脚大仙などが出迎えている。菩薩、

「玉帝さまにちよっとお目にかかりたいのです。お
とり次ぎをおたのみします」

天師の丘弘済は、凌霄宝殿に参内、その由を奏上し
た。玉座のかみてには太上老君が、うしろには西王母
がひかえている。菩薩は一同とともに奥にすすみ、玉
帝にあいさつした後、老君、王母とも礼をかわし、そ
れぞれ座につくと、さっそくたずねた。

「蟠桃の盛会はどうなりました」

玉帝

「毎年おこしを願って、楽しい時をすごしました
が、こしは化け猿にろうぜきを働かれ、わたしもは
なはだ不愉快、そこで十万の天兵を下界につかわして

征伐させていますが、この一日、まだ報告がありませんので、勝負のほどはわかりません」

菩薩はこれをきくと、すぐさま恵岸に、

「そちはさっそく天宮をくだって花果山に行き、軍情を探って来なさい。もし敵にあつたら、手をかすもよいが、かならずまことの状況を知らせるように」

といいつけた。恵岸は装束をととのえ、鉄棒をたずさえると、雲のつて天宮を後にし、花果山の前までやつてきた。見れば天羅地網が、とえはたえに張りめぐらされている。恵岸は、足をとめて営門の天兵に、

「わたしは李天王の第二子木叉、南海観世音の高弟恵岸である。いくさの様子を尋ねにまいった」

と伝えさせた。李天王は、はいつて差支えないむねの伝令旗を恵岸に与えた。恵岸は、四大天王と李天王に面接、平伏の礼をする。李天王は尋ねた。

「そちは、いづれからまいった」

「わたくしは菩薩に従い、蟠桃大会にまいりました。菩薩は会席の荒らされているのをごらんになり、天仙たちといっしょに玉帝にあらわれました。玉帝は、父上らが化け猿を討伐するために下界にくだったが、勝負のほどがわからぬむねの仔細を話されましたので、菩薩は、わたくしにこちらへ参つて真相を探つて

来るようおいいつけになったのです」

そこで李天王が昨日の戦いの模様を語っていると、そのことばも終らぬうちに、営門の外から、

「大聖めが、一群の猿を引きつれ外で戦いをいんどんでおります」

と注意する者がある。四大天王と李天王とが出陣の相談をしているのをみて、恵岸は言った。

「父上、わたしは菩薩のお云いつけで状況をさぐりに降つてきたのですが、次第によっては加勢してもよいとおゆるしを得ています。未熟ながらわたくし参つて大聖の手のうちを見たく思います」

李天王は念をおした。

「せがれ、じゅうぶん気をつけるのだぞ」

恵岸は鉄棒を打ち振りつつ営門をとび出すと大音声に呼ばわつた。

「齊天大聖とはどやつか」

悟空応じて、

「この孫さまがそうだが、わしに見参しようというお前は誰だ」

「わしこそは、李天王の第二子木叉、観世音菩薩の弟子の恵岸である」

「お前は、南海での修行をほつたらかしてここへ何

しにきた?」

「わしは師匠のいいつけで軍情をさぐりにまいったが、なんじの無道ぶりを聞き、ひとつとらえに来たのだ」

「よくも大口たたいたな、孫さまの棒でもくらえ」

惠岸は鉄杖をもってはっしと受けとめる。ふたりは、山の中腹、營門の外と、五六十合も渡り合ったが、惠岸はついに支えきれず、敗走してしまい、悟空もまた猿兵をまとめて、洞門外でひと息入っていた。

惠岸は營門にかけこむと、ハッハッと肩で息を切りながら、李天王に報告した。

「すごいやつ、すごいやつ。まったく神通広大です。

わたくし、ついに打ち勝てず、負けて帰りました」

李天王は、驚いて、すぐさま援軍を請うむねの表を書かせ、大力鬼王と惠岸とをつかわして天上におもむき奏上させた。ふたりは表を奉ったのち、惠岸はまた菩薩に謁して、悟空に打ち負かされた次第を報告すると、菩薩は、こうべをたれて、何事か考えこまれる。

いっぽう玉帝は、表を開いて救援を請うの文言を見ると、にが笑いして言った。

「化け猿め、十万の天兵を相手にして、ひけをとらぬとは、よほどの腕とみえる。李天王から援軍を求め

て来たが、どの神将をつかわしたものであろうか」

そのことばを皆まできかず、観音菩薩が合掌して奏上した。

「陛下、ご安心ください。わたくしが、かの猿を捕えることのできる神将を推挙いたします」

「それは誰です?」

「陛下のおい君、顕聖二郎真君です。いま灌州の灌江口においでですが、あの方はむかし六怪を征伐したことがあり、また梅山の兄弟や軍中には一千二百の草頭神らぎみがおり、神通また広大です。ですが、あの方は出動の命令なら動きませんがただのお召しとあつては腰をあげません。陛下よろしく出兵の詔をくだされ協力を求められましたら、猿めを捕えることがかないましよう」

玉帝はきいて、さっそく出兵の詔を出され、大力鬼王を使者に立てた。鬼王は詔をうけると雲にのつて灌江口に向かい、半ときもたたぬ間に、真君の廟に到着し、早くも廟では門番の鐘鳴が内に知らせたので、二郎神君は梅山の兄弟たちと、門外に詔を迎えた。香をたき詔を開くと、

花果山の妖猿齊天大聖な乱を作し、蟠桃の大会を攪亂せしにより、十万の天兵を派し山を囲みて収伏せん

としたるも、いまだ勝を得ず、今特にそなたおよび義兄弟を出動させ、即刻花果山に赴き、助力剿除せんことを命ずる、成功の後には、昇官恩賞重かるべし。

真君は大喜び、

「天上のお使者、すぐ助勢にまいりますゆえ、まづはお帰り下さい」

と、ふたつ返事。鬼王がそのむね復奏したことはさておく。

こちらは二郎真君、さっそく梅山の六兄弟を集めて同行を求めると、いずれもよろこんでお伴をした。そこで神兵を勢揃いさせ、鷹や犬をしたがえ、弓矢をととのえると、狂風を起こして、たちまち東洋大海をわたり、花果山にやってきた。見ると天羅地網がいくえにも張りめぐらされて進むことも出来ない。二郎真君、「余は頭聖二郎真君である。玉帝の命により妖猿を捕えにまいった。とくとく門をあけられよ」

と呼ばわった。神兵がさっそく順送りて奥へ伝えると、四大天王と李天王ら、みな營門の外まで出迎える。

たがいのあいさつが終つて真君、勝負いかにとたずねれば、李天王はこれまでの委細を申しのべる。真君はにこにこして、

「拙者がここへまいったのは、かやつと変化の術を

きそわんがため、諸公は、天羅地網をびしと張りめぐらし、上の方だけを、拙者の戦場としてあけておいてくれ、李天王は照妖鏡をもって空中に立っていてください。

旗色でもわるくなると、かやつ、ほかへにげこまんとも限りませんから、よくよく照らし出して、とりながさぬよう、くれぐれもお願ひいたす」

李天王は、いわれたとおり手配をおわると、真君は四太尉と二將軍をしたがえ、主従あわせて七人、いでや来れと陣を出て行く。諸將は陣勢をかためて鷹や犬をつなぎとめ、草頭神たちは指図をまつた。

真君が水れん洞の前にきてみると、ひとむらの猿どもが、見事な蟠竜の陣形をしいている。本陣には一本の旗が立ち、それには齊天大聖の四字。真君見るや、「このわる猿めが、齊天大聖とは片腹痛い」

とひとりごと。それを見つけた小猿がいそいで注進におよぶと、悟空は、金箍棒をおつとり、よろいかぶとに身をかため、營門からおどり出た。真君の姿に目をこらせば、なるほど眉目清秀、よそおいもまた俗っぽくない。悟空、ヒヒヒヒと笑つて、金箍棒をとりなおすと、大声に呼びかけた。

「お前さんはどこの若大将だ。こんなところへ、の

このこと戦をやりに出てくるなんて」

真君はどなりつけた。

「こやつ、明きめくらと見えて、余を知らぬな。われこそは玉帝の外甥、勅封昭惠顯聖王二郎なるぞ。いま勅命を奉じて、なんじをいけどりにまいった。なんじなお思い知らぬか」

「ずっと以前、玉帝の妹が、俗念を起こして下界に下り、楊君の細君になって一人の男の子を生んだところ、斧で桃山を切り荒したとか聞いたが、それがお前だったんだね。おぬしはまだ小せがれだ。手合せはしないからとっとと帰って、四大天王を呼んでおいで」
これを聞いた真君は激怒した。

「無礼なりやくたい猿め、わが刀をくらえ」

悟空は金箍棒をかまえてはっしと受けとめる。ふたりは、渡り合うこと三百余合におよんだが勝負は決しない。それとみた真君、神力を振って、からだをひとゆすりするや、身のたけ万丈となり、両の手に三尖兩刃の神鋒を振りかざした。そのありさまは、華山の峰々さながら。青い顔にむき出したときば、朱のような頭髪、兇悪そのものの姿となって、悟空めがけてまっこのから切りおろす。悟空また神通力をあらわし、真君そのままでの姿となり顔となって、如意棒をふりかざし

春の観音居鳥山白雲

神君に立ちむかう。そのさまは、かの崑崙山上に立つ天の支柱さながら。これを見た猿の陣勢、馬、流元師はふるえあがって旗をふることもできず、崩、芭二将もすくみあがって刀をふりあげることもできない。いっぽう、真君の陣では諸将が号令一下、草頭神を水れん洞に向かわせ、鷹、犬を放ち、いしゆみを組み、弓をしぼってどっと押しよせたので、あわれ、猿どもは、えものを放りだし、よろいを脱ぎすて、あるいは逃げ走り、あるいは山によじかくれ、又は洞に逃げ帰ってしまった。(つづく)

四月上旬から、白雲山の三つ葉つつじが、紫の蕾をほころばせると、十七日の春の例大祭を中心に真つ盛りとなって、花の紫に公園一帯が煙っているかのように、素晴らしい美観を呈します。このつつじは山のものだけに素野といった感じがして、この山に相応しくもあります。それも四月下旬になると、次第に色あせて、散るのですが、そのあとに三つ葉のうすみどりの葉がひらいて来ます。

それに代って四月下旬から、五月の中旬まで、紅のつつじが、色もとりにどりに咲いてきます。中でも赤、えんじ、ピンクなどの色が

入り乱れて咲いて来ると、訪ずれる人も日に増して多くなり、山はにぎわいます。

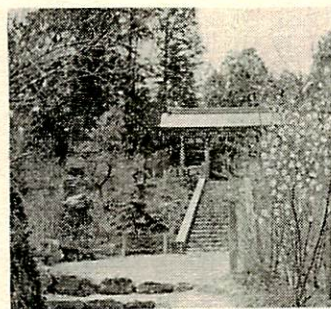
四月下旬から五月五日までの飛石連休に、訪ずれる人々、そのグループもいろいろいるのですが、特に五月五日の子供の日になると、団体もさることながら、家族連れの参拝が多く、したがって自家用車で広場もせまい位いとなります。

春の好季節が、人の心を自然と浮き立たせ、レジャーを最高に利用しての遠距離からの参拝者も少なくなかりません。

五月上旬になると、藤棚の藤が花房にむらさき色のをのぞかせてきます。花は五月中旬までが見頃です。吹く風に藤の花房がゆれ、その度に花の香が流れると、いつかぼーっとして来ます。

五月八日は恒例の花祭りが執行されま

す。花み堂は今を盛り
の紅や赤、むらさきの
つつじの花で一ぱい
にかざられて、そ



鳥居観音のつつじ

の中にお釈迦様がお立ちになるのです。

この日はお釈迦様を参拝する人々の手から甘茶が、ひしゃくで頭上に注がれます。

五月中ばをすぎると、すでに全山が若葉と化して、その眺めは一新いたしますが、麓に近い園内には、きりしまつつじの小さな花がむらがって咲いているのが瞳をひきます。

今年も、この山を去年と同じように、いろいろの花が咲いて、人々の目を、心を、なぐさめてくれることでしょう。

昭和四十三年のニュース（順不同敬称略）

○元旦祈禱会 晴、十時より、開祖平沼先生夫妻を始め、毎年欠かさず川越から車に分乗して馳せ参じられる、原田愛助、森田角三郎、平井敏治の諸氏を一同とする参拝と、東京から佐藤寿夫、若林五郎夫妻の方々と名栗の関係者が参集、口々におめでとうと、交わすあいさつも、その笑顔も、新春らしい和やかさが本堂にただよった。

祈禱札は個人又は講で一括してお申しこみいただいたのが、約三百名に達す。

○節分会 二月三日、晴、午後三時から、本堂を始

め、三蔵塔、奥の院、仁王門、子育て地藏の順に、有馬導師にしたがう、悪ま退散、福德招來の法要と読經のうち、節分の豆をまく、参拝者にはお守と炒り豆を入れた袋をくばる。

○春彼岸法要 三月二十一日、晴、十時より、導師有馬忠直師により開式、開祖平沼夫妻を始め代表役員平沼宏之外関係役員参列おごそかに執行さる。

折から石垣の上の沈丁げの香りがあたりに、ただよって春のさきがけを告げていた。

○高階猯下追悼法要 四月十五日、晴、午前十時三十分より、当山に生前いろいろと御協力賜った瑞仙猯下の法要あり有馬忠直導師によつて執行、開祖平沼先生夫妻始め、別所瑞城師外関係の方々多数参列、げんしゆくに行わる。

丁度白雲山のむらさきつつじが真盛りだったので、参拝のお客様方はよるこんで観賞さる。

○春季例大祭 四月十七日、晴、本堂前の入口に沿つて、つるされた講中名入のちょうちんに大祭の気分も高まり、定刻十時半には東京方面より鷺見保佑、小佐野賢治、佐野友二、桐木光三の役員諸氏を始め、浦和講、狭山不二ボイラー講、狭山講、川越親友講、豊岡講、坂戸講、地元役員平沼寛一郎、町田仲太郎、吉田

長太郎、岡部健次郎、平沼幸一、浅見寅雄、田島伝治、吉田仙太郎、岡部千三等多数参列す。

有馬導師、平野師の読經中、参列者の焼香参拝。

次いで十一時半より白雲山三蔵塔前に於て法要、式後各自若芽とつつじの花の香る歩道を探勝しつつ下山庫裡に於てこん談中食す。

○篤信家の参拝 五月十二日、晴、埼玉県の白岡町長竹林弥三郎氏外百五十名の参拝団と、文化財の研究で有名な行田市の山口平八先生外数名が来参さる。

○書道研修会 五月二十八日、晴、松田江畔先生を中心とした、新進書道家三千名程センターを宿として、庫裡に於て敷きつめられた毛せんの上で、思い思いの筆を振る様は見ると感心させた。ここは書道、茶道、花道、俳道等に利用されるにはもつてこいの処とこの際強く感じた。

○学生の座禅会 六月六日、晴、梅雨時には珍らしいよい天気、神奈川県の藤沢高校生松原由高君外十四名が、座禅修行のため来山、本堂に於て午後一時頃より座禅の修行をなす。現代の若いしかも高校生が座禅の修行をするため、ここまで来られたことに心から感心させられた。

又その礼儀といい態度には心をうたれた。

○三尊仏建設地鎮祭

七月七日、晴、白雲山三蔵塔の広場から北方にのぞんだところに、面白岩という山の地名がある、すでに地ならし工事がされて、海拔四百八十米、この広場に三尊仏が建設されるため、本田地鎮祭が実施さる、午前十時、枝久保宮司によって執行、青葉輝く全山、白いテント、張りめぐらす紅白の式幕に、式場いよいよ整然とす。本日の参列者、開祖平沼先生夫妻、代表役員平沼宏之、松井建設今津・服部の両氏外関係者二十名、かくしておごそかに終了。

○鳥居観音うら盆の行事

八月十六日、晴、午後三時から申し込まれた燈ろうの供養が、有馬導師、平野師によって執行、燈ろう六百を数う。一々戒名、又は先祖代々を読みあげて供養される。この法要は夕刻までかかる。

夕刻から数人の手伝いによって、自動車で燈ろうは名栗川畔に運ばれる。

流燈は御泳歌と読経のうちに一燈一燈静かに川面に川上から……流される。

数百の流燈が川一ぱいにかがやくと、観衆の誰もが同じ感慨に引きこまれてか、静寂そのものになる。

流燈会の後の煙花大会、盆踊り大会も各方面からのご協力によって、年と共に盛大になるのも感謝にたえ

ないところである。

尚この行事に参加するため、センターに宿りがけで瑞穂町から十数名のご婦人の一団があつたことも特筆する。

○秋彼岸法要

九月二十五日、晴、午前十時三十分より、有馬導師により執行、開祖平沼先生夫妻を始め関係者参列、十一時終了。

午後一時三十分から地元信者婦女子によって念仏会開催す。

○大黒天入魂式

十月二十一日、晴、午前十一時より、奥の院へ桐江先生作の大黒天が奉安されて、その入魂式執行。高さ一、六米（台座共）（しおり八号参照）有馬導師を始め、開祖平沼先生夫妻、特に大黒天と深い関係がある埼玉銀行の本支店からは堀込重役を始め多数の方々がお越しになって盛大であった。

○開祖平沼先生夫妻印度へ

十月二十七日、晴、今度で印度は二度目、約一カ月にわたって、前回渡印視察した仏跡と新しく、ネパール、セーロンまで足をのばしての壮途へ、羽田空港より出発。

○秋季例大祭

十一月十七日、晴、午前十時三十分より本堂、三蔵塔に於て執行。

有馬導師、平野師の読経により参列者焼香。

この日の参列各位、八王子洗心講長内田男三郎、飯能講長武居藤吉、狭山講井上竹吉、飯能植竹真三、所沢齊藤定治、東京亀田源次郎、坂戸若松正数、東京新妻次郎、同若林五郎夫妻、の諸氏と埼玉トヨペットからは従業員家族慰安会がセンターに於て開催されたので、社長以下五百名の参拝者で終日にぎわった。

○開祖平沼先生夫妻印度視察を終えて帰国

十一月二十七日約一カ月にわたつての巡拝視察旅行も無事に、元気で帰国す。代表役員平沼宏之、空港羽田に出迎える。

○除夜の鐘 十二月三十一日、鳥居観音では毎年、除夜の鐘の行事をしている、この夜はこの家庭でも紅白歌合戦をテレビで見ながら、あたたかい炬燵を囲んで刻一刻と去つて逝く年にそぞろ思いを送り、又刻一刻と来る新しい年にいろいろの思いをこらす。

その頃開祖平沼先生夫妻はすでに本堂に参入され、有馬導師と共に読経さる。

零時十五分前より参加者も共に観音経を誦誦す。それに和して間をおいて百八の鐘を代表役員平沼宏之氏がおごそかにならす。

一つ、二つ、………そして観音経誦も終つて、百八の鐘も鳴り止んだ、まさに一月一日零時十五分。

新講結成に御協力を

寺務局

昭和四十四年は講が改組されて三年目を迎えるので、昨年末で講員三千名のかくとかくをいたすべく努力いたしました、まだまだ不徳のいたり目標に達することが出来ませんでした。

本年こそは三千名のご加入がいただけますよう、努力いたします。どうぞ現存の講におかれましては、講元始め、役員各位は時局柄公私共にご多用とは存じますが、講員の増員に生々發展されますよう、おねがい申し上げます。

尚新しく結成されます地区におかれましては、それぞれの立場から、友人知人、グループを通じて、篤信の方が中心となられて結成ご登山くださるよう、謹んで御ねがい申し上げます。

合掌

鳥居観音のしおり 第十号

発行日 昭和四十四年四月一日 每号定価貳拾円

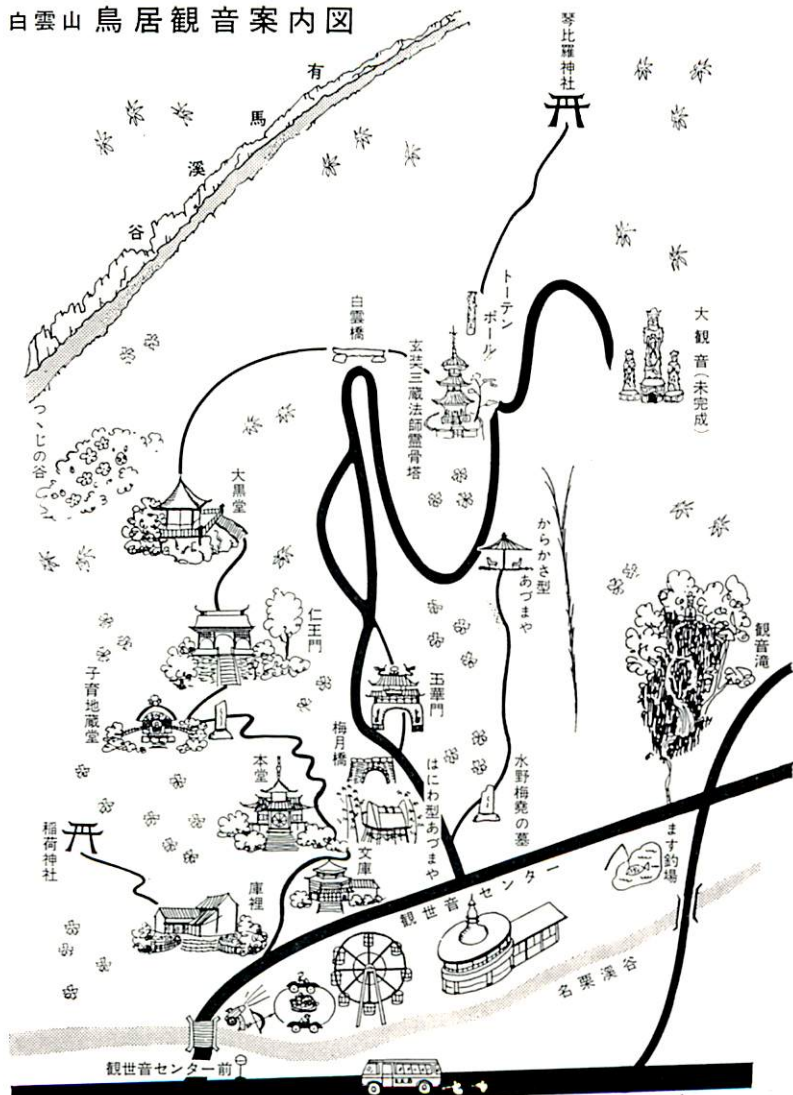
編集兼 発行人 埼玉県入間郡名栗村鳥居観音 岡部千三

印刷所 浦和市 武州印刷株式会社

発行所 鳥居観音

電話 ○四二九七〇四一五番

白雲山鳥居観音案内図



至版能35分

名栗

秋葉山

面白岩

観音滝 →

琴比羅神社

三蔵塔

蛇の目傘四阿

本堂

壇輪型四阿

梅月橋

梅峯之臺

鳥居文庫

名栗川

